

# 末黒野

すぐろの

1月号

(通巻917号)



## 今日の月

森清堯

風あればゆだぬるばかり女郎花  
千屈菜を映し池面のさざれ波  
宿場町の早も暮れ初め酔芙蓉  
秋海棠触れむばかりに潦  
微笑みに子細隠されこぼれ萩  
対岸の村の屋並や大毛蓼  
余白なき案内板や小鳥来る  
崖上の影濃き松や月今宵  
今日の月一本松の威を深め  
ひとつ寄せまたたぐり寄せ烏瓜  
修繕の足場組む音そぞろ寒  
幼児の呉るる団栗手のぬくみ

## 月光

岡野里子

秋海棠脛の花車なる女俤夫  
一川に伸ぶる一筋月明かり  
月光や川に朽ちたる舫ひ舟  
名月や己が影踏む杖の音  
手水舎の青々濡るる木賊かな  
本堂の裏は浄土や虫すだく  
この道の先は十字路秋の星  
霧ごめの溪の深さや水の音  
霧に浮くテールランプや九十九折  
湧水を噴き出す筧秋澄めり  
色変へぬ松の威を張り閻魔堂  
百幹の千年の杉秋気澄み

雁渡る

黒滝志麻子

(顧問)

ゆるやかに闇を脱ぎゆき鴟来る  
貸馬の鞍はづしある秋暑かな  
秋天やりフト大きく揺れて発つ  
枝先まで光放ちぬ実紫  
山峡の家みな藁家芋の露  
秋暑し漁網に乾く雑魚ひとつ  
海峡の潮目の薯し雁渡る  
秋深む水面を迅き雲の影

甲矢集

癌告知

田中臥石

秋の風妻子泣かせてしまひけり  
癌告知受けて妻泣く乱れ萩  
透析の永き四時間秋風裡  
駅出づる海への道や秋の虹  
庭の虫聞きみて俳句捨てずをり  
食用菊咲かせ余生をたのしめり  
背後より吹く秋風の潮匂ひ  
秋の日や腕にあまたの注射痕  
記者と語らふ窓越しに照り曼珠沙華  
記者一語一語の訛残る菊

今日の月

森清信子

線描の光となれり赤とんぼ  
うすうすと夕日に滲み白木槿  
畦ゆくや日のふんはりと曼珠沙華  
蝸の声重なるや日を惜しみ  
円満に生きたき余生今日の月  
はるかなる湯煙染めて秋夕焼  
頼りなき日差を厭ひ曼珠沙華  
爽やかや駅のSL磨かれて  
笹藪の木道を抜け秋茜  
秋霖や暗さの宿る堂庇

# 豊の秋

石黒興平

紅の畦となりたり曼珠沙華  
ジヨギングの親子の声の良夜かな  
名月に濡るれば急かぬ家路かな  
樽の栓きゆきゆつと鳴るや新走り  
カツプルのシニアライダー蕎麦の花  
穀蔵の鉄扉の軋み豊の秋  
山裾の夕日をとらへ秋茜  
間遠にて睡気を誘ひばつたんこ  
幟立てハイカー誘ふ茸飯  
秋夕焼切絵のごとき富士据ゑて

# 撥釣瓶

菅野日出子

哀へを見せぬ日差やさるすべり  
庭隅に時をたがへず曼珠沙華  
枝折戸の軋みはげしき日照雨かな  
秋彼岸寺に残れる撥釣瓶  
秋暁やとりとめのなき夢に泣き  
秋雷の去りて暫しの目覚めかな  
墨絵めく富士浮きたたせ秋夕焼  
散りてなほ香りほのかや金木犀

# 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



鹿の声

高木邦雄

夕さりの宗谷の岬鹿の声  
荒涼のサロベツ原野秋じめり  
漆黒の富良野の空や星走る  
可惜夜や満月映ゆる池の面  
久久の考妣の墓や秋茜  
故郷の香り豊かや今年米  
時の鐘色なき風の蔵の街

沈下橋

長尾タイ

とつおいつ八十路の道や式部の実  
生身魂父似と言ばれ齡重ぬ  
黄金の稲穂の重み農夫老ゆ  
稲刈機付き行く鷺の忍び足  
鰯雲七半渡る沈下橋  
流木の絡む橋脚秋出水  
磯鳴の群るる水際虚貝

今日の月

池乗恵美子

浄智寺や風呼びやすき初見草  
秋霖や逮夜の黙の深みをり  
コイントスに託す岐れ路秋の風  
一句添へ一献添へて今日の月  
秋の夜の降りみ降らずみ更けゆけり  
名月や十七音を夜もすがら  
木星の影寄り添うて後の月

水の秋

今村千年

バスを待つ釣瓶落しの停留所  
鳥渡るみなとみらいの塔の上  
新蕎麦や波郷縁の深大寺  
水の秋白帆行き交ふ鳩の海  
新走り五臓六腑を駆けめぐる  
どこからか木犀匂ふ夜の道  
いつも咲くところに確と曼珠沙華

夕化粧

大川暉美

秋暑しパワーシャベルの音猛き  
ジーンズの穴に遊ぶや秋の風  
風が風誘ひて揺るる秋桜  
本堂へ続く坂道昼の虫  
悠然と風を抱きて鬼やんま  
稲刈られ柵田は色を失へり  
路地暮れて際立つ匂ひ夕化粧

小鳥来る

太田良一

秋の蚊を殺す刹那や夜叉の貌  
田の神の安堵の息や稲の波  
月のせて海は平らになりけり  
三猿となりて健啖生身魂  
海兵の並ぶ艦上鳥渡る  
灯台を持たぬ小島や小鳥来る  
左手へ移す柄杓や秋惜しむ

晩秋

岡田史女

終日を風吹きつものる芒かな  
水面より暮れてゆくなり蚩草  
木犀に風のおつまる夕べかな  
港への歩道こぼるる銀杏の実  
晩秋の浪分けてゆきタグボート  
埠頭へと観光バスや秋さうび  
鉛色の空晩秋の港町

一番星

小田嶋野笛

逆風の煽るや鷹の山別れ  
白鳥座を仰ぎ倅の肩を借り  
一番星きらり一番虫ちちち  
粗塩や音立てて揉む秋茄子  
花野原創立明治の母校跡  
入相の鐘や這ひ来る秋湿  
無花果や甘きマグマの噴火口



青炎集 森清堯選



東大和 谷口律子

門を外し中まで今日の月  
水澄むや恐入るる小さき足  
宵闇や一軒のみの外灯り  
気になりし過去を片付け秋の海  
教卓のコップの花瓶秋の草  
しやがみこみ利く落花の香金木犀

横浜 宮元陽子

虫すだく古るる闇魔に立ち疎み  
名月や屋根のクルスの影の濃き  
空澄むや小魚動く忘れ潮  
秋冷や手燭の点す古祠  
縁石に座してバス待ち秋夕焼  
剥落の丸型ポスト秋徽雨

横浜 大内由紀

箒のる魔女めく雲や月の秋  
横浜の朝の船笛秋気澄み  
たんたたと行進曲や秋高し  
萩刈りて風の行方の失せにけり  
ぐつぐつと雪平鍋や今年酒  
寝惚けたる鴉の声や十三夜

三鷹 小林清彦

魂に形あるごと彼岸花  
満月や記憶のかげら埋めきれず  
じんわりと酔ひの醒めゆく夜長かな  
捨てきれぬ自我映されて月の影  
高層の夜を独り占めちちる鳴く  
鯛雲取り残されて日の暮るる

横浜 秋山文子

鶴頸へ挿す一輪や白桔梗  
白萩や小波のごとく闇に揺れ  
花束と鉢を持ちて墓参  
小鳥来る今朝コーヒーとモンブラン  
吾亦紅遠くへ行けぬ父の墓  
山の道敷をつつけば時鳥草

印西 大坂正

純白の夢より醒めてそぞろ寒  
蒼天の隙に消えけり秋の蝶  
濡れ縁に見知らぬ猫や秋日和  
己が肩へ寂しからんと赤とんぼ  
堰越ゆる水音ばかり谷津の秋  
爽気満つ古歌朗詠の老教師

横浜 神谷さうび

新涼やプディング揺るる銀の匙  
手捻りの壺に束ねて草の花  
身に入むや父の遺稿の読めぬ文字  
ひぐらしや杜の奥より夕迫り  
憂きことを飛ばす水切り天高し  
廃業の老舗の下駄屋そぞる寒

横浜 外山生子

戸を繰るや朝日に匂ふ金木犀  
かまつかの夕日に朱色極めけり  
畦道の足裏にやさし稲雀  
たどたどしき夫のありがと菊日和  
筒抜けの真青なる空柿熟るる  
雨後の朝色を深むる実むらさき

川崎 平澤侃

孟蘭盆会庭木の零す鳥語かな  
毒舌も芸の内なり生身魂  
猫じやらしあと十年の墓地買うて  
師の画集の模写の起伏や衣被  
象潟の船着き跡や花木権  
吉報を祈る診察秋の雨

横浜 市川夏子

笑み割れの石榴へ落暉ほしいまま  
風吹けば白刃の如く薄原  
露の身の試歩へ杖借る病後かな  
雨台風サランラップの端探し  
コスモスや風の私語めく花の揺れ  
縫針のすべりの良さや虫の夜

# 耕 土 集 岡野 里子 選



スーパーの生鮮売場秋深む  
月影や二つの影のちどりあし

横浜 佐藤 勝代

丸む身の体育の日や一万歩  
彼岸花愛でて喪服の老夫婦  
鶏頭一本小さき花壇に燃えさかる

幼児の肌の桃色桃すする

横濱 梅野 宏子

古のマニキュア遊び鳳仙花  
金髪の子の好物や茸飯  
朝比奈の墓所に香るや葛の花  
湯上りにシップ貼り合ふ暮の秋

音の無き影の過ぎるや桐一葉

横浜 森川 享

古民家の裸電球ちちろ鳴く  
秋彼岸砂場のふちの泥団子

新築中釣瓶落しの槌の音  
男らの料理教室茸飯

十五夜や久し振りなる鶴見川  
満月へ付き添ふ星の健気なる  
逆らはず生きて流れん秋の雲  
今年米今日届きけり雲高し  
値上りの剣菱二本秋惜しむ

横浜 小長谷 紘

蛇混柏を護る氏子や秋日和  
唐語は天麩羅といひ夫好む

横浜 片岡登志枝

秋うらら迷彩服の通字子

妣のおほぎ大きかりしや秋彼岸  
手をとりにて椎の実見てとおさげ髪

自治会館へ迷ひ出でたりいぼむしり

横浜 古宇田伸子

山グズ孫に譲りて敬老日

今宵まで鳴かぬちちろや籠の中  
叢雲を広げ現はる後の月  
寒き夜は鯖缶出でて鍋となり

谷底の風に煽られ秋の蝶

横濱 森 由佳

大風車色なき風を回しをり  
オカリナの微かなる音や秋の浜  
蟋蟀に一夜の宿を貸してをり  
網直す老漁夫一人鱈雲

秋涼や森の喫茶のジュレの色

横浜 北野 節子

再会に話の尽きず法師蟬  
秋茄子や紺艶やかに水弾き  
爽快と風透きとほり柘榴落つ  
計画の叶はぬままや小鳥くる

野の径の風にうなづき萩こぼる

横浜 西 計郎

同齡の友とおでん屋秋澄めり  
公園の桜紅葉や踊る子等  
爽やかや広野のはての遠き富士  
赤松の幹のいきほひ秋彼岸

方丈の茅葺き屋根やしだれ萩

横浜 廣部 尚美

朗読の流るるやうや秋澄めり  
旅先の路面電車や秋の風  
老いてなほ為すことの有り弁慶草  
手を止めて窓より見入る秋夕焼

クッションを替へて秋立つ風の音  
展望台ゆ初雪の富士青き湖  
木製の雨戸の重さ台風裡  
愛されし女王陛下星流る  
大雨の止みてしきりや虫の声

横浜 津野 桂子

新盆や親族集まり泣き笑ひ

狭山 山中 ミツ

コスモスや夫と通ひし幼稚園  
秋澄むや試飲自由のワイナリー  
秋うらら祖父にハグするおしやまな子  
秋高し車椅子押すお下げ髪

せめぎ合ふ叢雲と日や秋の川

三浦 田中由紀子

色変はる蠟燭の背や鉄扉  
翳りゆく沖の小舟や秋の空  
畦道の土の匂ひや豊の秋  
朝寒や紅茶の湯気の香ばしき

虫時雨はたと止みたる闇深し  
落花生の地干しや風の通りみち  
水澄みて藻を裏返す流れかな  
櫓田や生命力の強さ知り  
稲架の列友の足のみ見え隠れ

狭山 谷安喜美子

## 小川玉泉先生追悼句集

行く春の天の泉地へ立たれけり  
なほさらの師のこゑ胸に秋の声  
清らなる泉は今も滾々と  
聖五月師のほほゑみの天へ召し  
一灯の欠けて虚ろや雁渡し  
ひぐらしや先師の訃報きく哀れ  
すれ違ふごとの目差風涼し  
師の金句標に行かむ星月夜  
蓮の花見てをらると思ひしが  
新緑の中や師の影見失ふ  
星月夜偲ぶ恩師の影深し

森清 堯  
岡野 里子  
黒滝志摩子  
森清 信子  
菅野日出子  
今村 千年  
高木 邦雄  
小田嶋野笛  
岡田 史女  
大川 暉美

蓴舟沼は静かに雨を受く  
師の笑みの浮ぶ夜空や後の月  
海坂に沈む日輪秋夕焼  
師の句書く夫人の筆や鉦叩  
師の色紙を偲びて卓や秋灯下  
末黒野の教へはいまも小鳥来る  
夫婦して同じ雅号や二つ星  
秋深く俳句の御指導謝意深く  
添削の手腕絶妙紫苑かな  
身に入みて師の温顔と句短冊  
蒼穹へ発ち給ふ師や秋の水  
師の教へ永久に輝く星月夜  
色なき風と海渡り富士に消ゆ  
身に入むや今此処我と師の言葉  
菊枯る師の色紙見つ独り酒

加藤 静江  
太田 良一  
和田 慈子  
岩上 行雄  
荒井 貞子  
橋場 美篤  
上月 智子  
占部美弥子  
大内 由紀  
戸田 澄子  
沼崎 千枝  
池谷 鹿次  
小林 清子  
山崎 稔子  
木下 晃